

お客さまや社会の力になるために 次の時代へ「人」がつなぐ 人材育成の現場——能力開発センター

ブランドという約束を果たすのは一人ひとりの社員。

関西電力のブランドステートメント「power with heart」を実践する人づくりの現場、
関西電力能力開発センター講師の仕事を追った。

巣立ちを前に 仲間どうしで競いあう

日本列島が大寒波に見舞われた1月下旬、関西電力の人材育成を担う関西電力能力開発センター（以下 能開センター）のグラウンドには、配電技術者の卵たちの熱気のこもった掛け声が飛び交っていた。彼らは、昨年4月に入社し、ネットワーク技術部門に配属された新入社員36人、約10カ月の研修成果の発表会として「総合工事訓練」を進めている。

6人ずつ6班、研修はもちろん寮生活で文字どおり寝食を共にした仲間たち。ともに力を合わせ、高さ14mの電柱に昇り、高圧線・低圧線・引込線を引き、変圧器・避雷器の取り付け等の工事の完遂をめざす。与えられた時間は150分。

総合採点員として真剣なまなざしで彼らを見つめる簗内敏之。彼は能開センターネットワーク技術研修講師として卵たちを指導してきた。

人づくりの原点

講師となつて2年弱の簗内にとって、ここは配電技術者としての原点だ。能開センターの前身・関西電力学園高等部配電コース卒で、35年前、簗内も寮生活を

人々が不安げに駆け寄ってくる。早く電気を、その思いを痛いほど感じた。そして灯りが点いた瞬間。お客さまの不安げな表情は満面の笑みになる。「ありがとう！」感謝の言葉に、ライフラインを担う仕事をやっていて良かった、誇らしさを感じたと簗内は言う。

恐怖心との闘い

あれから22年。震災後に生まれた新入社員たちに震災を伝え、ライフラインを担う仕事の意義を伝授することも簗内の仕事だ。

ライフラインを担う配電技術者への第一歩、それは基本的な技能を身につけること。電柱に昇って配電設備の維持管理を行う「特殊技能」の修得には、まず電柱上で自由に身体を動かせるようになるというけない。安全ベルトを腰に巻き、胴綱（命綱）に身体を預け、両手で特殊な工具を使いこなして作業を行う――まさに特殊技能だ。

つい最近まで普通の高校生だった彼らには電柱に昇った経験などなく、恐怖心との闘いから研修が始まる。もともと高い場所は平気で、20m以上の鉄塔も怖くなかったという簗内も「電柱は怖かった」。安定感のある四角錐の鉄塔に対

簗内は総合採点員を務めた



机上研修



6人ずつ6班のチームで10カ月間の研修成果を競う



送りながら技能を一から学んだ。

85年入社、最初の配属先は神戸の三宮営業所だった。現場第一線で、配電設備の保守・運用業務を17年間担当し、神戸ネットワークエンジニアリングセンターに異動。一貫して神戸エリアの安定供給を担うとともに、教育担当として後進の育成にも力を注いできた。

被災地に灯りを点す

震災当日、無我夢中で出社した簗内が目にしたものは破壊された神戸の街。自分たちが維持管理してきた設備、美しかった神戸の街の、目を疑うような無残な姿を前に、ただ茫然とした。

お客さまに一刻も早く電気を送らなければならぬ。応急送電完了までの1週間、三宮営業所も被災するなか、工事車両に寝泊まりし、避難所や公園の街路灯、1軒1軒のお客さまに電気を届けられるよう力を尽くした。

一つひとつ安全を確認してからの復旧作業は時間がかかる。関西電力の車を見つけると、「ウチはいつになるんや」と、

し、電柱は1本のポール、しかも強度を保つため「しなる」ように設計された電柱は、作業を行う上部が揺れる。彼らにどうやって恐怖心を乗り越えさせるのか。簗内は、最初に高い電柱に昇らせ、正しく恐怖を味わせることが大事だと言う。「恐怖を感じなければ、安全意识を持つことはできない」からだ。一度怖さを体感し、低い電柱で慣れていく。このようなさまざまな試練を乗り越え、発表会で作業を進める教え子たちの姿に目を細める。「いやあ、嬉しい。よくここまで成長したな。大したもんだ」



チームで醸成する責任感と自主性

お盆前までは、学生気分の抜けなかった者も、9月に変化が表れる。それまでは昇柱訓練など個別研修が中心だったが、9月からチームでの作業研修が始まる。それぞれの分担作業をきちんと行わないと工事は完了せず、責任感と自主性が芽生えてくる。1月の発表会では、どの班も見事なチームワークで工事を進めていた。

藪内は、閉会式で講評を行った。全チーム元氣よくやりきったことは成長の証。安全確認動作も定着してきた。ただ、施工品質があまり良くない。もっと手早く電気をお届ける関西電力の配電技術者たちに、温かくも厳しい言葉で締め括った。

「現場」はお客さまのそばにある

実習を終えた新入社員たちは2月、それぞれの現場に配属される。今は基礎段階の彼らも、OJTや研修、技能発表会などを通じて技能を磨く。6年から8年後には現場第一線で作業指揮を行っている姿が見られるだろう。

山間を走る送電設備と異なり、配電設備は街なかや住宅地などお客さまの身近

表彰を逃したチームに藪内が反省点とアドバイスを与える



最優秀チームにはトロフィーとメダルを贈呈

にある。お客さまのすぐそばが、配電技術者の現場だ。設備の巡視点検、メンテナンス作業、緊急の修理、配電線側に伸びてきた木の伐採も含めて、電力の安全・安定供給に欠かせない大事な仕事であり、お客さまの暮らしに直結する。

技術を強みにまごころと熱意を込めて電気を届ける

藪内は言う。関西電力の強みは技術である。技術の維持・継承が課題であるが、技術を支えるのは「電気の安全・安定供給を通じてお客さまの力になる」約束を果たすという使命感だ。講師として、自分自身がかつて体得した技能を若い人に教え、先輩たちから受け継いだ使命感を伝え続ける。技術を修得することに達成感を、そうした積み重ねで得られる自信を胸に、現場へと送り出してやりたい。

現場では失敗もするだろう。でも、お客さまに喜ばれる仕事・社会を支える仕事をしているという誇りがあれば、苦しいことも乗り越え一人前の配電技術者に育ってくれる——父親のような笑顔で、藪内は話を結んだ。躍



取材・編集／田窪由美子

編集後記

power with heart “まごころと熱意を込めたサービスで、お客さまや社会の『力』になりたい”——そんな想いを込めて関西電力がブランドステートメントを策定して1年。この4月からはガス市場も小売全面自由化がなされ、本格的なエネルギー競争時代を迎えます。今号のテーマは「経営戦略と企業ブランド」。片平秀貴さん、御立尚資さん、佐々田弘之さんにお集まりいただいた[鼎談]では、経営環境変化のなかで持続的成長に向けた企業の経営戦略とブランドについて考えるとともに、続く[オピニオン]では、3人の識者・専門家に提言をいただきました。そして[かんでんFOCUS]では、挑戦者としてガス市場に挑む関西電力の戦略について訊くとともに、[現場力ノ最前線]では「power with heart」を実践する人づくりの現場・能力開発センター講師の仕事を追いました。ブランドは企業に限ったものではありません。[旬発NIPPON]では、人口減少下で住み続けたい・戻って来たいまちであるためにシビックプライドの醸成に取り組む朝来市のシティプロモーション活動を紹介しました。晴れやかに生き生きと草木が芽吹く春の季節、始まりの予感を胸に、新しい『躍』をお届けします。(T)

躍

題字 森 詳介(関西電力株式会社 相談役)

『躍』(やく)という誌名は、皆さまとともに「躍進」「飛躍」していきたい、また皆さまにとって「心躍る」広報誌でありたい、との思いを込めて名づけました。

『躍』の内容はホームページでもご覧いただけます。
<http://www.kepco.co.jp/yaku/>

発行●関西電力株式会社 広報室
発行人／保田 亨 編集人／松倉克浩
〒530-8270 大阪市北区中之島3丁目6番16号 電話06-7501-0240
企画／編集●株式会社エム・シー・アンド・ビー

